

主 題：幸福に降服する 11
 聖書箇所：マタイの福音書 5章12節

先週に続いて、マタイの福音書5章からイエスの語られた山上の説教の冒頭に、山上の説教のイントロダクションとしてイエスが語られた「至福の教え」の最後の部分を見て行きたいと思います。人間の歴史の中であって、神の前に敬虔な男性や女性は迫害を受け続けて来ました。ヘブル人への手紙の著者は、その手紙の中でこのように言っています。「また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、:37 また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、…——荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。」（ヘブル11：36-38）。これが神の前に正しいすばらしい信仰をもって歩んだ人たちの生きた人生でもあったわけです。神の前に忠実な多くのしもべたちは、打たれ、たたかれ、石打ちの目に会い、木にかけられ、首を絶たれ、時に闘技場に投げ込まれ様々な野獣と戦わされ、またある時には、全身をワックスで固められて闘技場のたいまつとして火をつけられるようなことまでされたことがあります。神を憎むこの世の人たちは、人間の歴史の中で常に神に忠実であろうとする者たちに対してこのような仕打ちをしてきたのです。今日でも、このような苦しみ、痛み、死に直面する兄弟姉妹がこの世界には存在します。人々は今でも、キリストに従う者たちを蔑み、憎み、そして追放しようとするのです。今日、この日も、この世のどこかには脅迫を受け、たたかれ、キリストを信じる信仰の故に殺されて行く人がいるわけです。キリストの故に、彼らは投獄され、死を経験する迫害の中に、そのような危険の中に置かれているのです。このような人たちが経験して来た様々な迫害を考えるなら、私たちが今日、この日本で受ける事柄というのは比較にならないのかもしれませんが、確かに、今の私たちにも迫害はあります。キリストを信じるが故に様々な困難が起こってきます。けれども、それらは今話してきたものに比べるなら、余りにも軽い困難であり、余りにも一時的なものであるのかもしれませんが、事実、もしかすると私たちは今、生きているこの時代を「休息の時」ということができるのかもしれませんが、日本にいるクリスチャンにとって、私たちが今経験する迫害というのは、歴史の中で様々な敬虔な人物たちが受けてきた迫害に比べれば安らぎの時なのかもしれません。神のすばらしい計画の中であって、神は私たちにこのような安らぎの時を備えてくださっているのです。激しい苦しい様々な迫害を、今私たちに与えるのではなくて、確かに迫害を受けているのかもしれないけれど、それは比較的柔らかなものであることを良しとされているのです。そして、そんな時代に私たちが生きているからこそ、今私たちはこの迫害についてよく考えなければいけないのです。クリスチャンとして、このような迫害を受ける時に、どのような態度をもってこの迫害を受けて行くのか、今だから私たちは準備をすることができるのです。私たちが今、迫害を考えるにあたって、間違いなく二つの事を考えなければいけません。

(1) もし私たちが迫害を受けていないとするならば、私たちは自分の生涯に、神が求めておられる義が欠如していないかを吟味する必要があります。なぜなら、神の義が現わされている天の御国に属する人なら、そこには必ず迫害が伴うとイエスが約束したからです。だからもし、まったく迫害がないなら、迫害を殆ど経験することのない人生を送っているとするなら、私たちがまず一番初めに吟味しなければいけないことは、本当に私は神の国の民として生きているかどうかということです。

(2) 同時に、もし私たちが義の生活を送ろうと願い、少しずつでもキリストに似た者としての人生を歩んで行くとするなら、私たちが考えなければいけないのは、本当に苦しい迫害が起こった時に、それを正しく受け入れる準備ができているかどうかをしっかりと吟味しなければいけません。

迫害は約束されているのです。クリスチャンであるなら必ず起こるのです。その規模は分かりません。もしかすると明日にでも、日本の国が変わってクリスチャンを迫害するようになるかもしれません。もしかすると再び、天皇を崇拜しなさいというようなことが起こるかもしれません。それをしない人たちは投獄される、そんな時代がやってくるかもしれません。準備できていますか？そのような厳しい迫害に会うための準備ができていますか？私たちはよく覚えておかなければなりません。ある日突然、そこに飛び込んでしまったら、私たちはアタフタするかもしれない、どうしたらいいのかわからない、神はそのようなことがないように、私たちにこのように非常に柔らかな厳しくない迫害の時を備えてくださっていて、それを通して、本当に私たちが困難に出会った時に、どのようにその迫害を受けることができるのか、約束されている困難を乗り越えて行くことができるのか、そのことを準備しなさい、と言われているのだと思います。私たちは迫害がやってくる時、驚く必要はないのです。間違いなく来るからです。むしろ、来ないことを驚かなければなりません。では、困難が私たちにやってくる時、迫害の

嵐が私たちの周りに吹き荒れる時に、私たちはいったいどのような態度をもってそれを受け止めることができるのでしょうか？私たちがどのような態度でその迫害を受けることが神に喜ばれることなのでしょう？神は今私たちがそのことをしっかり学び心を整える時間を与えてくださっているのです。皆さんといっしょにそのことを考えて行きたいと思います。

☆どのように迫害を受け入れて行くのか？

先週、私たちはどんな迫害があるのかということを考えました。今日私たちは、マタイ 5 : 12 からどのようにしてこの迫害を受けるのかということを知りたいと思います。それによって私たちは迫害がある時に、約束されたものを受け取る者として、神の前に正しい態度をもって神のすばらしさを現わしながら生きて行くことができるようになるだろうと思います。5 : 12 にはこのように書かれています。「**喜びなさい。喜びおどきなさい。天においてあなたがたの報いは大きいからだ。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。**」と。天国に属する者たちは、ひとりで簡単に言うなら、迫害を喜ぶ者です。私たちが自分自身を見てどうしようもないなあ〜と思うのは、もしかするとこんな時かもしれません。それは良いものを自分で勝手に悪いものに変えてしまうことです。ヤコブはその手紙の中で言います。1 : 2-4 「**私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。：3 信仰がためされると忍耐が生じるということ、あなたがたは知っているからです。：4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。**」と。ところが私たちはその試練を誘惑の機会と変えてしまって、自分たちが罪に陥るようなことをするのです。同じように私たちは、神が私たちに約束して私たちが喜ぶことができる者として与えてくださっている迫害を、様々な困難を、むしろ喜ばない機会と変えてしまうことがあるわけです。最も厳しい迫害の中であって、私たちがキリストのように、すばらしい神の前にある敬虔な姿を現わして行くことができるようになるためには、私たちはどのように迫害を受けるべきなのかということを知りたいと思います。そのためにまず最初に、「どのように迫害を受け入れるべきでないか」ということについて考えたいと思います。

1. 迫害に対する間違った方法

1) 私たちは迫害を受ける時に復讐の思いをもって受けてはいけません

復讐してはいけません。様々な困難が目の前にやってきた時、私たちのありがちな態度は困難をもたらした人に対して復讐をすることです。「殴られたら殴り返せ」という訳です。もしかすると、ここにいる皆さんの多くは、このことに関して問題をもたないかもしれませんが、ある人たちは非常に深く抱える場合があります。つまり、嫌なことをされたら私はその人に嫌なことを仕返して当然だと思う人たちです。世の中の多くの人たちはそのように考えます。先週も話しましたが、例えば、子どもがいじめられたとき、喧嘩になったときに、「自分から殴ってはいけませんが、殴られたら必ずやり返せよ」と教える親はたくさんいるのです。世の中の人たちはどのようにして自分自身を守ることができるのかということを知りたい、その方法のひとつとして殴られたら殴り返すのです。嫌なことをされたら嫌なことを仕返すのです。けれども、私たちクリスチャンはそのような方法から解放された者です。私たちの願いは自分の手で復讐をすることではなくて、復讐をしてくださる方に信頼することでした。このことをパウロははっきり私たちに教えています。ローマ人への手紙 12 : 17-21 を見るとパウロは明確にこのことを表わしています。「**だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。：18 あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。：19 愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」：20 もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。：21 悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」**」、私たちはこのことばをよく知っているのです。悪をもって悪に報いてはいけません、かえって善をもって、正しいこと良いことを相手にしなさいと。なぜなら、復讐は神のものだからです。何か問題が起こったときに、これは迫害だけではなく、あらゆる分野に適用することができますが、皆さんがだれかに嫌なことをされた、被害を受けた、その時に私たちが仕返しをしようと思えば、仕返しを実践するならば、よく覚えておいてください、皆さんは盗みを働いています。なぜなら、復讐は誰のものでしたか？神のものでしたか？皆さん、神からものを取りたいと思いませんか？イエスはご自身の生涯の中でこのような態度をはっきりと示されました。特に、人生の最後であって、イエスはユダヤ人やローマの兵隊から様々な苦しみを与えられました。不当な扱いを確かに受けました。罪のない人物が罪とされ、彼はあざけられ人々から蔑まれたのです。その時にイエスはどのようなことをしたのでしょうか？ペテロはこのように説明しています。1ペテロ 2 : 23 「**ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。**」、これがイエスです。迫害を受けたときにイエスは何をしたのか、罵られても罵り返さず、苦しめられても脅す

ことをせず、正しくさばかれる方にお任せになったのです。私たちの前に様々な困難、迫害がやってきた時に、私たちが一番最初に考えないことは復讐することです。やられたらやり返す、そんなことを神は求めていないのです。復讐をしてくださるのは神です。神がその行為にふさわしい報いを与えてくださるのです。だから、神の前に正しいことをして行くのです。何をするのでしょうか？敵が私を攻めたら、私は善をもってその敵に返すのです。飢えていたら食べ物を与え、渴いていたら水を与え、彼の必要が満たされるように、その人のために仕えて行くことです。

私たちはどのように迫害を受け入れるべきでないか、一つ目は復讐をしないということです。

2) 憤慨をしない

怒らない、憤りを覚えないこと、この二番目は一番目より少し難しいかもしれませんが。実際に行動しない、殴り返さないということはできるかもしれませんが。でも問題は私たちの心の中です。単に行動を抑制すればそれで良いのでしょうか？嫌なことがあった時に、言い返したい、殴り返したいと思っても、それは我慢して、ずっと心の中でブツブツ言い続けていたら、それを見て神は皆さんのことを「よくやった！よく我慢した！」と言ってくださるのでしょうか？私たちは「ああ、我慢ができた、何と私は靈的にすばらしい人物だ」と、そこまで思わないかもしれませんが、時々そのような考えているのかもしれませんが。ところが神はその心を見て何と言われるのでしょうか？もし、私たちの心が神の前に正しくなかったら、行動をとるかとらないかはあまり重要ではないのです。確かに、具体的な復讐をしないことは必要です。だからといって、復讐心に燃え立っている、怒りに満ちているその心を持ち続けることを私たちは良しとするべきではないのです。イエスはこのように言われています。マタイ5：22「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。」、問題はどこにあったのですか？行動ではないのです。ことばではないのです。問題は私たちの心です。イエスは天国民の特徴として、5：9で「平和をつくる者は幸いです。」と言われました。これが天国に属する人の特徴なのです。平和をつくる人の心が怒りに満ちあふれていると思いますか？怒りに満ちていてどうして平和をつくるのですか？相手に対する憤りに満たされながら、どのようにしてその人との間に平和を保つことができるのでしょうか？平和をつくり出すことができるのでしょうか？おかしいです。それ故に、私たちには様々な困難がやって来るかもしれませんが、私たちは平和をつくろうとするし、敵を愛し、敵のために祈ろうとします。これはイエスが山上の説教の中で教えています。5：44「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」と。怒りに満ちていて愛せますか？その人のための最善を祈れますか？ローマ12：14にはこのようにあります。「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません。」、つまり、天国に属する人は平和をつくる者である故に、迫害があったときに、単に復讐をしないだけではなく、その人はその心において、敵を愛し、敵のために祈り、敵を祝福しようとするのです。もし、私たちが本当に復讐は神のものであり、神が正しく報いてくださることをしっかりと覚えているなら、私たちの心の中に復讐心があること、その心が様々な迫害に対する憤りに満たされているとするなら、それはおかしなことです。だから、そのような態度をもって迫害を受けてはいけません。復讐をしない、憤慨しない、それだけではありません。三番目が一番難しいかもしれません。

3) 落胆してはいけない

これまでの二つは相手に対する思いでした。復讐するという行為も相手に対してすることです。怒りをもつこともそうです。でも、この三番目は自分自身に対することです。確かに、「分かりました、神さま、復讐はあなたに任せます。」と言うかもしれませんが。実際に手を出すこともしないし、ことばで相手を傷つけることも止めるかもしれません。憤りに満たされるのは悪いから、何とかして平和をつくり出そうとその人を愛し祈り祝福をし続けるかもしれません。でも、その時に私たちが「でも、なぜ私はこのような苦しみの中に置かれなければいけないのだろう」と、自らをあわれむ行為に没頭するならば、それは正しい迫害の受け入れ方がではありません。多くの時に、私たちはこのことばを発します。「どうしてですか？」「なぜ、このように生活しなければいけないのか？」「なぜ、こんな目に会わないといけないのか？」と。実際に起こっている事柄を見て落胆し、そして、迫害が起こるというすばらしさに目を向けることがなく、自己憐憫の世界へ溺れ続けるのです。もしかするとある人たちは、こんなことが起こるのなら信仰なんてもたなければよかったと思うかもしれませんが。「神さまの完全な計画？これが完全だったら私はそんな計画はいりません。」と言うかもしれません。本当なら、キリストにより似た者になることができるように、私たちがきよめるために与えられているすばらしい困難な機会を、私たちはどうしようもない、受け入れ難い、落胆するのにふさわしい機会と捉えるのです。

この思いをきっとここにおられる多くの皆さんはもったことはないのでしょうか？けれどもそれは、私たちが迫害を受けるときの態度ではないのです。私たちの模範であるキリストは迫害を受け

た時に自己憐憫に陥ったと思われませんか？ヘブル人の手紙の著者は12：2でイエスに関してこのようなことを述べています。「**信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。**」。皆さん、よく思い出してください。イエスは苦しみを受けることをこよなく愛していましたか？それを受けたくてたまらないと思っておられましたか？違います。ゲッセマネの園でイエスは何と祈りましたか？「**父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。**」（ルカ22：42）と。どうしてですか？苦しみは現実だからです。イエスはその痛みを受けたいとは言っていない。けれども、神のみこころならばわたしは受けますと言われたのです。では、ゲッセマネの園でそれが神のみこころだとわかっているから、ああ、なんてわたしは可哀想なのだろう、こんな苦しい思いをしないとイケないなんてと、自己憐憫の世界に陥って行ったのでしょうか？ヘブル人への手紙の著者は言いました。目の前にある喜びをもって、イエスは十字架での苦しみを耐え忍ばれたと。

自己憐憫や落胆は、私たちがキリストから目を離す時に起こります。私たちがもっている最善よりも、神の知恵がはるかにすばらしいことを知っていながら、私たちがその方に信頼することを止め、その方から目を離すときに、私たちは何と私は可哀想なんだろうと周りを見つめてそのような思いに支配されて行くのです。神の完全な計画の中で神は皆さんに困難が起こることを良しとされたのです。皆さんが苦しみを通ることを良しとされたのです。そのようにして皆さんの信仰がきよめられ、より信仰が成熟することができるように、神は皆さんに困難な季節を備えてくださっているのです。それ故に、私たちはこのような迫害を落胆に満ちた心で受け入れるべきではありません。まるでそのような迫害というのが、私たちが神から遠ざけてしまう、その関係を切ってしまう、そのようなものであるかのように捉えて、ああもうだめだ！と思っ受け入れるべきではないのです。むしろ、その反対であるべきです。パウロはこのように言っています。ローマ8：35、パウロは質問します。「**私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。**」と。皆さん、答えを知っておられるでしょう。パウロはこう答えます。ローマ8：38-39「**私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちが引き離すことはできません。**」、できないのです！不可能なのです。もし神のものとしてされているならば、たとえ、私たちの前にどんな困難が起ころうとも、それが私たちが神の愛から引き離すことは不可能なのです。それなら、どうして私たちは自分を可哀想と思うのですか？それを起こして下さった完全な計画をもった神が私を守ってくださるのです。皆さん、パウロと同じように言えますか？何も私を引き離すものはないと。私は神の愛のうちに確かに守られている、だから、私は落胆もしないし可哀想だとも思わない、むしろ、この迫害が与えられているすばらしい祝福に喜びを見出すのです。覚えておいてください。間違いなく、皆さんがキリストに似た者として、義の生涯を天国に属する者にふさわしく歩んで行くなれば、必ず、そこには迫害が来ます。もし、迫害が起こっていないければ、迫害が来なければ、私たちは自分の信仰をしっかりと吟味するべきです。なぜなら、もしかすると迫害が起こらない理由は、私が神の前に正しく歩んでいないからかもしれないし、天の御国に属していないからかもしれません。でも、クリスチャンとして正しく歩んでいるなら、そこには必ず迫害がやって来ます。それが起こったときに、私たちは復讐をもってそれを受け入れることもしないし、憤りに満ちた怒りをもってそれを受けることもしないし、また、何と私は可哀想なのだろうと落胆の思いに支配されて、それを受けることもしないのです。

2. どのように迫害を受け入れるべきか

では、いったいどのように迫害を受け取るべきなのでしょう。イエスはそのことを非常に簡潔に話しておられます。復讐や怒りや落胆によってそれを受けるのではなく、私たちが持つべき心の態度がどのようなものか、イエスは二つの動詞をもってこの態度を強調しています。イエスは言います、「**喜びなさい。喜びおどきなさい。…**」と。ほかに見ることでできないような喜び、思わず、あまりの嬉しさに飛び跳ねてしまうような喜び、幸いだ！という思いに支配されているが故に抑えきることができないその喜びをもちなさいと言うのです。喜びに満ちているのです。それが私たちが迫害を受けた時にもつべき態度です。子どもたちが待ちに待っていた玩具を与えられた時、クリスマスや誕生日に「これがほしい！」と思っていた物が目の前にあります。まだ包みがかかっています。どうするでしょう？大急ぎでテープをはがし紙を破ってそれを出します。それがまさに待ち望んでいた物なら大喜びでそれを持って部屋中を走り回るかもしれません。それがここで言われている「**喜びなさい。喜びおどきなさい**」ということです。ちなみに、イエスはこの動詞をどのような意味合いで使っているのでしょうか？喜べたらいいですね、ではないです。「**喜びなさい**」です。これは命令形です。ということは、必然的に、もし私たちが迫害に会った時に、喜びおどっていないければ、それは何になりますか？命令を行わなかったら罪です。神の前に不

従順です。なぜなら、イエスがあなたはこうなさい！と命じているのです。勧めているのではないのです。こういうのがいいですね、これが理想的です、と言っているのではないのです。あなたはこうなさいと言っているのです。あなたがもしキリストの故に迫害を受けた時に喜ぶことがなければ、皆さんは主の前に不従順であり罪を犯しているという自覚をもたなければいけません。当然のごとく、キリストはここで私たちに迫害があるという、迫害自体を喜べとは言っていません。私たちに迫害が起こること、その迫害があることは、確かに私たちに悲しみをもたらし、私たちはなぜこのようなことが起こるのだろうと嘆くべきことです。なぜでしょう？神の義が示された時に、人々は義を憎むが故に罪深い対応をするのです。だから迫害が起こるのです。私たちはその罪深い対応を喜びません。天国民の特徴は何ですか？罪を悲しむのです。それは自分の罪だけでなく、あらゆる罪が起こることに対する悲しみをもつのです。だから、人々が私たちに対して罪深い態度で接してきた時に、その態度に喜びおどるわけではないのです。それは悲しいのです。なぜなら、神の義が現わされて神のすばらしさが示されているのに、人々は私はそんなものはいらない、逆らいたいのだと言って迫害をするなら、私たちは悲しみを抱くべきです。

では、どこに喜びを置くべきでしょう？イエスは私たちにその理由を次のところで教えてくれています。「**天においてあなたがたの報いは大きいから。**」と。なぜ、私たちクリスチャンは迫害の中にあって喜びを見い出すべきなのでしょう？その理由は今読んだとおりです。天においてあなたがたの報いは大きいのです。世の中が皆さんに対して罪深い対応をするときに、そこに喜びを見い出すことはできないでしょう。実際に、その対応だけを見るなら嘆き悲しみを覚えるかもしれません。けれども、天の御国に属する者たちは自分自身の生涯を、今ここでの現実即してその観点から見ようとはしないのです。確かに、この世は皆さんに対して今与えられている苦しみに目を向けさせようとします。確かに、この世は今私たちの前に起こっている痛みを感じさせようとします。それらは現実です。苦しいです。痛いです。辛いです。でも、天の御国に属しているクリスチャンは、現在の状況に身を置くのではなく、その観点からすべてを見るのではなく、永遠の視点からすべてを見ることができるとは、私たちの人生は一瞬にして過ぎ去るものです。今あったものが次の瞬間にはなくなっているような儚いものです。けれども、神が約束してくださっているものは永遠に続くということを私たちは知っています。喜びはここにあったのです。迫害が起こったときに、その迫害を今ここからの観点から捉えるのではなくて、天の御国に属する故に起こった迫害であると捉えるのです。天国民としての特徴をしっかりと発揮して生きている故に人々はそれを憎んで迫害をするのです。さまざまな苦しみを与えるのです。だから、私たちは天の御国の視点で、永遠の視点でそのことを捉えるのです。

この御国に属する人たちは常に永遠の視点をもっていました。ヘブル人への手紙11章でこの著者が教えることは興味深いことです。たとえば、アブラハムとその子どもたちも同じように今ここという観点から物事を見ることをしませんでした。彼らはこの地上での約束を待ち望んでいたのではなく、ヘブル11:10を見ると「**彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。**」と、何のことでしょう？永遠のことです。このアブラハムの子孫たちと同じように、私たちクリスチャンもこの地上のことではなく、天を思って生きているはずですが、ヘブル11:16にはこのように記されています。「**しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷に**あ**こがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。**」と、この天において私たちは報いを受けるのです。私たちが想像することができないほどすばらしい報いがそこには用意されているのです。「**あなたがたの報いは大きいから。**」とイエスは言っています。この大きいとは量のことでありません。大きさが大きいのです。あまりにもすばらしく他に類を見ることがないほど偉大な報いです。すばらしさを現わしています。たくさんあるということではなく、これ以上ない、想像を絶するほどすばらしい報いがそこには待っているのです。それが私たちには与えられているのです。ちなみに、この報いということばは単数形が使われています。つまり、ひとつの報いが与えられるのです。どのような報いでしょう？イエスはここで明言されないのです。でも想像するに、私にはひとつの事柄が頭に浮かびます。それは黙示録21:3-4に記されていること、これが報いだと思います。「**…見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、:4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。**」と、4節にはどんなことが起こるのかというその結果が記されています。それは報いではありません。それは単なる付録です。何が一番すばらしいのでしょうか。この3-4節でもっとも強調されていること、21章全体の中で、新しい都エルサレム、永遠の住居、そこにおいて最もすばらしい特徴は何か、ヨハネが強調しているのは3節に記されています。神が私たちと一しょにそこにおられるということです。それ以上にすばらしい祝福はありません。天の御国でのもっともすばらしいことは、私たちが完全な者

になることではありません。私たちの罪や、また、その罪の影響が取り除かれることでもありません。天の御国でもっとも素晴らしいことは、私たちが神の前に立って、神のすばらしさを仰ぎ見て、その神の似姿に変えられて永遠に神を賛美することができること、それがもっとも素晴らしいことです。神ご自身を永遠に楽しむことができるのです。これまでもいろいろなところで何度かこのことを話してきました。私たちはこの地上にあるあらゆることでも自分の心を満たすことはできません。本当に満足を得ようと思うならどこに行くのでしょうか？神のところですか。神はご自身をもって人々を満たそうとどのように造られたのです。今、私たちは救われて神によって満たされる方法を知り、罪との葛藤の中にあっても満たされようとして生きて行く中でその満足を得て行きます。でも完全ではありません。天では何が起ころのでしょうか？欠けたところがないのです。神が横にいてくださるのです。神を目の前にしてずっと永遠の時を過ごすことができるのです。

時々、天の話をしていると、このような質問を受けます。天にあって他の人のことが分かりますか？と、私も想像したりしますが、正直なところ、天に行ったらそんなことはどうでもいいだろうと思います。なぜなら、神がそこにおられるからです。皆さんが親しい人と話しているときに、そこに大好きな有名人が現われたらどうしますか？その人のところへ行こうとします、関心は全部そちらに行ってしまう。それと同じです。むしろそれ以上です。神が目前にいる、そんなすばらしい祝福が私たちに与えられることが約束されているのです。モーセは確かにこのように考えていました。ヘブル人への手紙の著者はモーセに関してこのように言いました。ヘブル11：26「**彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。**」、彼の視点は今ここではなく永遠の視点でした。そのようにすばらしい祝福が大いなる報いが私たちに与えられているということを知っているが故に、パウロはコリントの人たちに対してこんなことばを告げました。Ⅱコリント4：17「**今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。**」、これが私たち天国に属する者たちがもっているべき視点なのです。なぜ、迫害で苦しんでも喜べるのでしょうか？それは私たちが永遠の視点でものを見ているからです。迫害が起ころのは、私たちが天の御国に属する者として歩いているからです。それ故に、迫害が起こった時に確信することができるのです。永遠は確かに私のものだと。だから、クリスチャンは迫害の中に喜びを見出すのです。

そして、イエスは私たちにどのようにしてそれを証明されるのかということ最後に付け加えています。12節後半「**あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。**」。アダムの時から今日に至るまで、特定のことは変わりません。変わっていません。人間の歴史を見た時に、アダムの時から人間には常に罪がありました。人間の歴史を見た時に、人間の前には常に神のあわれみがあり、神によってあがなわれ、神の前に正しく歩むようにされた者たちがいました。人間の歴史を見た時に、そこには常に、神の前に敬虔に歩む者に対して、罪を犯す者たちが迫害を続けて来ました。アベルは自分の義の故に殺されました。エリヤやエリシャは敬虔な預言者だったから迫害されました。エレミヤは神のみことばを忠実に人々に語ったから人々から蔑まれ嫌われました。バプテスマのヨハネは人々の罪を的確に示したが故に首を切られました。ステパノはイエス・キリストの福音をユダヤ人たちに従順に伝えたが故に石打にあって死にました。何よりもイエス・キリストは、完全な義の生涯を人々の前に示したが故に、神の子であったが故に、十字架にかけられて殺されました。迫害というのは、私たちに救ってくださる神に忠実な者の証明です。預言者たちにおいてそうであったように。私たちがこれらの神の前に敬虔なしもべたちと同じ足跡をたどって進んで行くとするなら、私たちに間違いなく、同じ定めが待っているのです。

いったい、私たちはどのようにして迫害を受けるのでしょうか？喜びをもってそれを受けます。喜びおどってそれを受けます。確かに、この世は私たちから多くのものを取り去ろうとします。私たちの財産、友人、私たちのいのちを。けれども、この世が取り去ることのできないものがあります。それは私たちに与えられている喜びです。永遠が約束されているが故に、どんな状況に陥ったにしてもそのすばらしい報いを受ける希望と確信があるから、もつことができる喜びをこの世は決して取り去ることはできません。皆さんのいのちを奪うことができます。皆さんの財産を奪うことも、家族を奪うことも、職を奪うこともできます。けれども、皆さんのうちに神が与えてくださっている、救われた者だけがもつことのできる喜びを奪うことはできません。だから、イエスは「**喜びなさい**」と言われるのです。それを実践しなさいと。使徒たちも迫害を受けた時に「嬉しい」と言いました。主の名のために迫害されるようになるのだと。「**喜び、喜びおどりなさい**」とイエスは言われます。それ故に、私たちは迫害を受けるときに、このような態度をもって迫害を迎え入れるべきなのです。確かに、今私たちの前には迫害による死はありません。けれども、いつそれが起こっても、私たちが喜びと心からの感謝と希望をもってこれを受け入れることを学ばないといけないのです。

長い時間をかけて至福の教えを見てきました。そこで私たちは非常に多くのことを学びました。イエスは私たちに対して「あなたは幸いだ！」と言われます。天の御国に属するからです。この地上においてもっともすばらしい祝福にあずかっている人だとイエスは言われるのです。皆さん、自分自身のことをそう思われますか？天の御国に入っているから、私たちは天国民としての特徴をしっかりと発揮して生きて行かなければなりません。心の貧しさ、罪に対する悲しみ、柔和さ、義への飢え渴き、さまざまな特徴があげられていました。皆さんのうちに見えますか？「ない」と言われる皆さん、よく吟味してください。本当に天の御国に属しているのかどうか。属しているなら、今それが少しずつでも現われているなら、世の中が私たちを憎んで仕方ないほど、義の生涯を生きて行こうではありませんか。そうすることによって、神のすばらしさを私たちがこの世にしっかりと現わして行くことができるように。